Column
調査の
達人

ドナルド・J・トライマン

社会階層研究と社会調査の巨匠

石田 浩
東京大学社会科学研究所 特別教授

ドナルド・J・トライマン（Donald J. Treiman）は，現役の教員としては引退(Distinguished Professor of Sociology Emeritus)したものの，現在も米国カリフォルニア大学ロサンゼルス校(UCLA)のDistinguished Research Professorとして世界の社会階層研究を牽引する社会学者である。

トライマンは，米国オレゴン州にあるリベラルアーツ（一般教養)カレッジとして有名なリード大学で社会学を学んだ後，シカゴ大学大学院でRobert W. Hodgeの指導の下で社会学の修士・博士号の学位を取得した。ウィスコンシン大学マディソン校で助教授，コロンビア大学で准教授のポスト経て，1975年からはUCLAにおいて長く教鞭をとり現在に至る。国際社会学会（International Sociological Association）の社会階層部会（Research Committee 28 on Social Stratification）の会長を長く務め（1990-98），アメリカ社会学会の貧困・不平等・移動セクションのロバートM. ハウザー特別栄誉賞を受賞している。

トライマンの貢献は，下記の3つの点に集約される。第1は，「職業威信（occupational prestige）」に関する研究である。職業についての人々のもつ序列・格付けを職業威信と呼ぶ。トライマンは，職業威信について日本を含む60の社会（そのうち13は複数時点を含む）の研究から，職業の格付けの構造は，時間とともに変化することはなく，異なる社会においても一定であることを発見した（Treiman, 1977）。これは，「トライマンの不変性（Treiman Constant）」と呼ばれ，社会階層研究における数少ない経験的一般化命題として評価されている（Hout and DiPrete, 2006）。この職業威信の不変性に基づき，トライマンは国際的・時系列的に比較可能な「国際職業威信スコア」を考案し，地位達成過程の比較研究に応用した。

第2に，トライマンは社会階層に関する大規模な全国標本調査を，南アフリカ共和国，東ヨーロッパ，中国で実施してきた。社会移動や不平等についての実証的なデータが乏しい社会で，それぞれの国の専門家と連携しながら，国際比較が可能な精度の高い調査を企画・実施することで，貴重な調査データの蓄積・分析に携わってきた。トライマンは，社会全体を代表でき国際比較に耐えうる質の高い調査データの蓄積が，社会階層研究の発展に必須であることを，身をもって示してきた。

第3は，次世代の階層研究者の育成である。計量分析のテキスト（Treiman, 2009）を執筆するだけではなく，世界各国で計量分析・社会階層についての講演やセミナーを行い，次世代の研究者を支援してきた。特に中国・香港・シンガポール・南アフリカでは，客員教授として教鞭をとり，後進の育成に尽力してきた。

トライマンのエネルギーは衰えることなく，近年は中国での調査の分析を通して，不平等とライフコースの関連，中国国内での移住を促す要因とそのインパクトについての研究などを行っている（例えば，Treiman and Walder, 2019を参照）。第一線で活躍する研究者として，その研究業績から今も目を離すことはできない。

謝辞　トライマン先生から，コラム執筆のための情報提供と写真掲載の許可をいただいた。記して感謝したい。

文献

Hout, Michael and Thomas A. DiPrete, 2006, "What We Have Learned: RC28's Contributions to Knowledge about Social Stratification," *Research in Social Stratification and Mobility*, 24: 1-20.

Treiman, Donald J., 1977, *Occupational Prestige in Comparative Perspective*, New York: Academic Press.

Treiman, Donald J., 2009, *Quantitative Data Analysis: Doing Social Research to Test Ideas*, San Francisco: Jossey-Bass / Wiley.

Treiman, Donald J. and Andrew G. Walder., 2019, "The Impact of Class Labels on Life Chances in China", *American Journal of Sociology*, 124 (4):1125-1163.

Column
調査の
達人

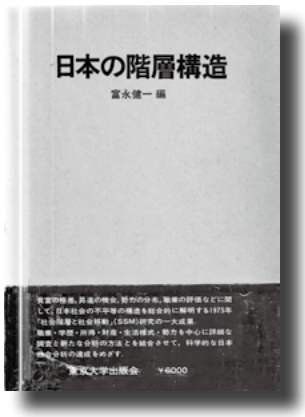
富永健一

友枝敏雄
大阪大学国際共創大学院学位プログラム推進機構 特任教授

「調査の達人」というタイトルのもとに，富永健一を取り上げることには，やはり門弟子の一人として違和感を抱く。門弟子のみならず，富永健一の業績に接してきた多くの研究者も同じことを感ずるであろう。富永は，戦後の日本の社会学において，つぎつぎと輝かしい業績を世に送り出した研究者であるが，彼の研究姿勢は「理論研究と実証研究」をともに遂行するというものであった。そのことは彼の薫陶を受けた門弟子たちが，院生時代に「理論研究と実証研究の二足の草鞋を履きなさい」と言われたことに明らかである。

富永の東京大学文学部時代の指導教官は尾高邦雄である。また富永の若い時代の業績に，『社会変動の理論』（1965）やパーソンズとスメルサーの『経済と社会』（1958－59）の翻訳があることから明らかなように，彼は社会変動論および経済社会学の専門家として研究をスタートさせている。尾高邦雄が1955年の第1回SSM（社会階層と社会移動）調査の中心人物であったことから，富永は尾高の研究スタイルおよび自身の関心たる社会変動論の延長線上に，実証研究への志向性を育んでいたと考えられる。

実証研究における富永の業績は，次の2点からなると言ってよい。1つは1975年の第3回SSM調査で研究代表者をつとめた社会階層研究であり，もう1つは郵政省「郵便貯金に関する研究会」の一環として行われた家計の貯蓄行動調査の分析である。社会階層研究における富永の問題意識は，「近代化」の進展がどこまで階層の障壁をゆるやかにし，機会平等な社会を達成しうるのかにあったと思われる。このことは，第3回SSM調査の研究成果である『日本の階層構造』（富永編，1979）に所収された「社会階層と社会移動の趨勢分析」という論文に示されている。このような階層構造の流動化（平易に言えば「努力すれば何とかなる社会」）への期待から派生するテーマとして，「地位の一貫性・非一貫性」や「中流意識」への関心が醸成されたのであろう。



もう1つの家計の貯蓄行動調査は，1977年に第1回調査を開始して以来，4年ごとに行われ，1997年の第6回調査までなされた。富永は1993年の第5回調査まで参画している。この調査の分析結果は，当時の郵政省貯金局から出された報告書にまとめられているが，一般書としては『日本人の貯蓄』（富永・間々田編，1995）が刊行されている。家計の貯蓄行動調査の中心となったのは，経済社会学を専門とする間々田孝夫（当時東京大学大学院院生，現立教大学名誉教授）だった。私も第1回調査から参画し，間々田が作成した調査計画の一部を分担する役割を担った。この調査において私は，〈調査票の作成→プリテスト→データ分析→報告書の作成〉という一連の過程を学習することができた。

富永の実証研究への志向性は，彼の学問の基本的モチーフである近代化論にもとづいていたと考えてよいであろう。満州事変が勃発した1931年に生をうけ，終戦時に陸軍幼年学校の生徒だった富永は，やはり欧米社会に対する日本社会の遅れに気づかされた日本人の一人だったはずである。近代化論研究の一環として実証研究があり，欧米レベルの実証研究を日本でも実現したいという野心が，富永を「調査の達人」にしたのではないだろうか。富永の祖父は，明治の知識人池辺三山（朝日新聞主筆）である。池辺は青年時代（1892－95）にフランスに留学している。富永の学問的生涯をふり返ると，そこに池辺三山のエートスが脈々と息づいているように思われる。